

# 時代の風 長谷川真理子

総合研究大学院大学長

ものの由来を知ることが大切な。それは面白いだけでなく、当たり前だと思っ

た。それは、哺乳類の中耳には「つち骨」「あぶみ骨」「きぬた骨」という三つの小さな骨があり、それらが鼓膜に運動して音を聞く役目を果たしている。この仕掛けは絶妙であり、耳が聴覚のための装置であることは自明だ。ところが、中耳の由来を見ると、それは魚が陸に上がった後になっ

さて、大学という社会装置である。昨今は大学改革

## 大学という社会装置

の一層の促進というところが叫ばれており、国立大学法人は①世界のトップを目指す大学②特定の分野で活躍する大学③地域貢献を果たす大学、の三つから一つを選

のあまり共有されないまま、現在の大学改革の議論が進められているように思う。19世紀後半から20世紀にかけて作られた世界の諸大

など、12世紀のヨーロッパにまでさかのぼる。碩学と呼ばれる人物のまわり若者たちが集まり、教

がある土地の法律には縛られない。など、大学とは最初から国際的な団体であり、大学独自の自治を要求し、多くの闘いの果てにそれらを獲得してきた。

立大学などでは、教授が経営者の言いなりになることを求められた時期もあったが、大学はそれにも抵抗してきた。

という根源的な欲求があるのだ。「知らない」よりは「知っている」ことの方をよしとする。そのような価値観は、文明の一部なのだと思

# 始まりは知への欲求

大学であっても、社会の新たな潮流に適合するため、日々、改革に取り組んでいるのも事実である。

しかし私は、大学という社会装置がそもそもどのような由来でできたものであり、それが続いてきた理由は

その後、ルネサンスを経て絶対王制の時代に入り、各国の君主が教養を身につけ、それを誇る時代になる。そこで王侯貴族の寄付によ

る大学が続々とできた。ケンブリッジ大学の各カレッジは、そのような寄付によって設立されたものがほとんどである。その先は、

12世紀から今に至るまで、細部は変われどもずっと存在してきたという組織はま

とが、知識追求のそもそもの目的なのではない。大学が、現在の社会状況に適合した役目を付加していくことも必要だが、もともと大学の追求の欲求と、それを学びたいという若者の欲求とは、人間の本性だということではないだろうか。



丸山博撮影